

洞爺湖有珠山 現地再審査報告書

渡辺真人（産総研）・中田節也（東大地震研）・竹之内耕（糸魚川）・大嶋利幸（糸魚川）

期間：平成 24 年 11 月 28～29 日

主な参加者（所属）

岡田 弘（北海道大学名誉教授）・大島直行（伊達市噴火湾文化研究所所長）・三松三朗（三松正夫記念館館長・NPO 有珠山周辺地域ジオパーク友の会代表）・廣瀬 亘（北海道立総合研究機構地質研究所地域地質部地質防災グループ主査）・安藤 忍（洞爺湖有珠火山マイスター）・川南恵美子（洞爺湖有珠火山マイスター）・馬場俊治（有珠山ガイドの会）・佐々木清志（洞爺湖温泉観光協会事務局長）・田仁孝志（洞爺湖町観光振興課）・毛利貞秀（そうべつ観光協会事務局長）・加賀谷仁左衛門（ピザ&ホットサンドPT リーダー）・福田茂夫（洞爺湖有珠火山マイスター）・酒井卓泉（うす観光ボランティアの会）・小倉定一（オコンシベの会）・真屋敏春（洞爺湖町長）・石澤高幸（伊達市企画財政部財政課長）・多田正司（豊浦町総務課長兼企画調整課）・工藤正彦（壮瞥町総務課長）・武川正人（洞爺湖町経済部ジオパーク推進課長/洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会事務局長）・遠藤一也（洞爺湖町経済部ジオパーク推進課）・加賀谷にれ（壮瞥町総務課ジオパーク推進係）・中谷麻美（洞爺湖町経済部ジオパーク推進課）・畑 吉晃（洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会事務局）・三松靖志（壮瞥町商工観光室主幹兼ジオツーリズム推進係長）

見学地点

善光寺、アルトリ岬、北黄金塚公園

現地再審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

災害遺構の保護は、草刈りなどのメンテナンスを行うが基本的に現状のまま手を加えず自然に任せる方針をとっている。ジオパークとして、噴火地形、災害遺構の保護についての考え方を説明できるよう整理しておく必要がある。断層によって変位した道路（災害遺構）の改修工事では、関係機関との調整によって曲がった原状のままで工事を完了できた。関係機関のジオパークに対する理解がすすんだものと評価される。旧とうやこ幼稚園の草刈や整備が市民ボランティアによって行われ、新たなサイトとして公開される予定である。善光寺（洞爺湖町）とアルトリ岬（伊達市）周辺は、有珠山の岩屑なだれの流れ山が聖地（お寺やアイヌのチャシ）となり、また、豊富な海産物育成の土台ともなっており、良質なジオストーリーがある。さらに、火山マイスターの私設資料館があり学習施設となって活用されている。北黄金塚遺跡（伊達市）は湧水と縄文集落との関係、アイヌの生活などが学べ、情報センターがあって体験学習ができる施設がある。これらのサイトと有珠山を結びつけて説明できるガイドが求められる。

2) 教育・研究活動

学校教育でジオパークを活用した実践例が広がっている。壮瞥町では教員新任者研修でジオサイトを利用しており、また、教員が火山ジュニアマイスターへの指導を行っている。大学教員を招いた火山についての授業方法が教員・ガイドを対象に実施され、教員免許更新にかかわる講習の中ではジオパークの講演が行われている。理科センターに異動した教員がジオの魅力を宣伝して、さまざまな教材や授業のジオメニューを発信して教員の指導をしている。ジオフェスティバルが全道規模で実施されており、壮瞥町では防災キャンプが実施された。北海道大学、北海道開拓記念館など道内の研究者らによって有珠火山の研究、地域の考古学的研究、ジオパークに関する研究が活発に行われている。

3) 管理組織・運営体制

壮瞥町から洞爺湖町へ移行したジオパーク事務局は、お互いの市町間の信頼関係が保たれて機能し、人事異動もジオパークの裾野を市町職員に広げる利点があるとされる。しかし、事務局長の異動が3人目である。短期間の人事異動は、ジオパーク建設の中長期的課題の把握と解決、その持続性という点において障害になる可能性があり、さらに、GGN への貢献という点では海外への窓口が変わるのは好ましいこととは思われない。研究教育活動においては、研究者と環境防災総合政策研究機構がこれまで支援を行ってきた。しかし、この体制は世代交代と持続性、また、日常業務における迅速な対応において弱点があるように見える。事務局への専門家の配置を含む体制強化とそれをささえる財政問題について議論すべきであり、中期的な体制強化プランを示すことが望まれる。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

ジオパークガイドは、火山防災・自然・歴史文化の分野別と地域別からなるそれぞれ 15 の団体に所属している。実際、エコミュージアム構想ベースの従来のガイド活動が続いており、各ガイド団体同士の連携がうまくとれていない現状がある。また、ガイド内容が個々の専門に偏っている傾向がある。これを改善するために、分野横断的なジオストーリーを案内できるようガイドの研修会を開催しており、さらに、ガイド団体を一本化する前段階のジオパークパートナー登録制度をつくった（現在 62 名）。ジオパークガイドを育成していく中で、地域防災と地域づくりの担い手である火山マイスター（現在 23 名）が牽引役になることが期待される。品質保証された一定レベルのガイドを早い時期に育成するための計画を協議会で作成し、実行することが強く望まれる。

「地球体感」がテーマの観光パンフレット LaToya（4 市町）が日英の両言語で作成され、旅行商品のさまざまな開発（修学旅行、来生物駆除を兼ねた体験型宿泊、防災教育、食の恵みを組み合わせたツアーなど）が行われ、観光協会などによる誘致活動も積極的に行われている。とくに東日本大震災以降、防災教育旅行の学校側のニーズが高まり、関西方面の進学校が複数訪れている。インフォメーション施設である道の駅（複数ある）の利用者が年間 90 万人あり、利用客は右肩上がりで伸びている。有珠山ロープウェイでのガイド利用者数は約 2 倍増になっており、有料のガイド付きオプショナルツアーにも参加している。火山村をつくった有珠山のロープウェイ会社は山頂駅を拡大する計画がある。ジオパークの旗が掲げられた洞爺湖マラソンが実施され、北海道新聞社がジオパークガイドブックを発行した。洞爺湖の DVD など発売されている。さらに、来年以降、ボート業者による湖の七不思議をめぐるボートツアーの計画がある。また、ピザプロジェクトが地域住民

によってすすめられている。このように民間や地元発案の取り組みが創出されてきており、さらなる発展が期待される。

ジオツーリズムにおいて、i 情報館、ビジターセンター（火山科学館）、火山村などの諸施設が、来訪者に対しどのような機能を分担しているのか整理しておく必要がある。また、一部のサイトで複数の野外解説板があつて、肝心の眺望を妨げているところがある。解説板を多くせず、解説板に頼らない解説方法を工夫すべきであり、景観に配慮した小型のものにすることや板面を傾斜させるなどの配慮が望まれる。

5) 国際対応（国際貢献）

GGN 大会、APGN 大会への参加のほか、火山関係学会、JICA の取り組みに参加し、City of Volcano では学会のコンビーナーを務めた。また、韓国チェジュ島ジオパークから視察団が訪れている。しかし、ジオパークに直接関係した GGN 大会、APGN 大会への参加以外の国際貢献について、それらがジオパークとどう関係しているのか考えを整理しておく必要がある。すなわち、洞爺湖有珠山ジオパークが世界の火山防災関係者だけでなく GGN 関係者にもジオパークの取り組みをどう PR および連携したか、その成果をわかりやすくまとめるとともに、GGN のホームページや EGN ニュースレターにそれらの結果を早急に投稿することが望まれる。

6) 防災・安全

地域防止の担い手である火山マイスターを中心に、次の噴火の死傷者ゼロを目標に地域防災に取り組んでいる。壮瞥町における防災キャンプの実施、火山ジュニアマイスターの認定が行われている。

以上